

# 先憂後楽

佐賀城本丸御殿前に私達が待ち望んでた  
待望のレストランが愈々開店

その名も「さがレストロ館」  
の名称でレストラ  
ンが平成二十一年三月  
二十九日に新規オー  
プンしたが、この建  
物は明治の中頃に建  
てられた洋風建築で、  
永い歳月を風雪に耐  
え抜いたその姿は佐  
賀城とのマッチング  
もびつたりで、佐賀  
城を活動の場として  
いる私達としても大  
いに喜ばしい事であ  
り、今回の開店は県  
内の方々は云うに及  
ばず、県外からの利  
用者も大いに歓迎さ  
れるものと期待する  
ところである。

ガイド諸氏におかれても是非共宣伝をお願いしたいところである。因みに、この建物の歴史をたどって見ると、明治二十年

に佐賀県警察部庁舎として県庁横に建設され、昭和十一年に県蚕糸取締所として活用される為に現在地に移転されて以来、利用方法は変わるも今日まで建設当時の面影を保ちながら保存されて来たものが、今回改めて「佐賀レストロ館」として甦ったものである。



「二月十四日にこう云う形の石を見つけて撮影しました。」  
私のブログで紹介すると佐賀新聞さんの目に停まり、十八日に取材にいられたため、ひよっとしたらこのハート形を探しにこれらも知れませんか？  
そこで皆さんにご協力ををお願いしたい事があるので、

「これは発見された戸田氏（水・土曜班）の話ですが、先日来館者を出迎えるの為に鯉の門前で待機していた折に、ふと見るとハート形の石があるのを見つけたとの事です、何とも夢のあ

題字・佐賀本丸歴史館  
杉谷 昭館長

る面白い発見ではないでしょうか。  
来館者とのコミュニケーションを深める為に是非共、協力しようではありませんか。

そこで戸田氏も云う様に、単に場所を教えるのではなく、出来る限り来館者が自力で見つけ出す事を心がけて、およその場所のみを教える様にしようと思っております。協力方宜しくお願い致します。

## 畳に関するエピソード

皆さんは何時も身近に感じておられる畳について、どれ程ご存知であるだろうか、今回はその畳について触れて見ようと思う。

畳とは、和室の床に敷く敷きもので、藁を縫い固めて作った畳床にイ草で編んだ表を付けたものを布で縁を付けたものであるが、その語源は動詞の「畳む」の名詞形で、古くはむしむ・ござ・こも等の敷物の総称として「畳」が用いられ、薄い敷物を何枚も積み重ねて使用し、使用しない時は畳んで置くことから「畳む」から「たたみ」が名詞化されて「畳」となったものである。



のが、部屋中に全体にひかれる様になったのは室町時代に発達して来た寺院造りや寺院等からであるが、一般庶民にまで普及して来たのは明治になってからだと言われている。

さて、畳の大きさであるが、そもそも畳の規格サイズが定まったのは十六世紀終わり頃の京都であり、畳で部屋を構成し、周囲に柱を建て、"畳割"と云う方法を造り出したのが始まりである。

つまり畳面が部屋の広さの呼称であり、これが京間としてなじみの畳であり、主に近畿以西で使用されており、その大きさは九五五ミリ×一九一〇ミリ（長さ六尺三寸）で、これが平面計画の基準になるのである。一方江戸では「柱割」が考案されるのであるが、その理由は度々火事に見舞われた江戸では、工事がしやすい様に材木の規格化を図り柱で部屋を構成し、畳は内側に敷いて柱の中心で囲まれた範囲が部屋の広さの呼称となって、江戸間（関東間）として静岡以東で使用されており、畳の大きさは八五〇ミリ×一七六〇ミリで京間より小さく、関東間と京間を比較すると京間は関東間の一、二倍の広さで京間の六畳は関東間の八畳に近い広さとなっている。

ところで、今で云う「畳」とは「厚畳」と云って座つたり寝たりする場所に一時的に敷かれていたも

じであり、「大八車」は畳に合わせた作られていると云う事をご存知であることが、京都では畳のサイズは何処へ行っても同じと云う事から、引越しの際には畳も一緒に持ち出したと云われているが、如何ですかこの話は・・・

案内の途中で歩きながらでも話をされる機会があればとの思いから、書き綴って見たものである。

## 振替えり研修を振り返って

編集局小寺

日頃の活動お疲れ様です。さて、今回ボランティア新聞の編集局より、振り返り研修について執筆するよう依頼がありましたので、寄稿したいと思います。研修については私自身拙いしやべりで、どれだけ皆さんに伝わって居るのか、反省しているところであり、そこで色々云つてもいいと云われそうなので文章ではなく、「あいいうえお作文」を作ってみました、如何でしょうか。

え顔で笑い合う  
ボランティア仲間  
お客様あつての  
お粗末でした(笑い)  
今後とも、職員共ども宜しくお願い致します。  
佐賀城本丸歴史館

## 佐賀城の新しい顔

恒松準一

この度、人事異動があり、新年度より次の方々があらたに佐賀城の住人となられましたので、ご紹介致します。

副館長へ古川英文氏  
「八賢人等の企画・編集者です」  
学芸係長へ山崎和文氏  
社会教育・文化財課から  
「山口係長の後任です、どうぞよろしくお願いします」  
企画担当へ古賀健二氏  
空港・交通課から  
「初のお城勤めですが、楽しく頑張ります」

よつこそいらつしやいまして、よろしくお願ひ致します。

尚、副館長であった佛坂勝幸氏は有田工業大学へ、学芸係長であった山口久範氏は名護屋城博物館へ、企画担当であった恒松準一氏は職員課へとそれぞれ移動されました。  
今後のご活躍を期待致しております。

## 次回展示の予告案内

平盛二十一年度最初のテーマ展として「西洋医学と佐賀藩」を計画しています。  
本年の六月六日～七日の二日間、佐賀市アバンセを会場に、第一一〇回日本医

学史学会総会及び学術大会」が開催されるのにあわせて、佐賀大学・地域学歴史文化研究センターとの共催という形で、「佐賀藩と西洋医学のかかわり」について展示予定をしております。展示内容は佐賀大学で保管されている資料をはじめ、当館でも預かりしている「好生館資料」など、普段あまり見られない貴重な資料をご紹介します予定ですが、種痘（牛痘）を積極的に導入し、更に医師免許制度を成立させた佐賀の開明性を全国にアピールするには絶好の機会だと思っております。

ボランティアの皆様には解説等でお世話になると思いますが、ご協力をお願い致します。

尚、事前解説の日程につきましては、後日改めてご連絡致します。  
佐賀城本丸歴史館  
主査 富永さゆり

## お知らせ

この度、ボランティア会の会長に山中輝見氏（水曜班）が、同じく同副会長に田中猛善氏（木曜班）がそれぞれ新しく選出されましたので、ご報告致します。  
前会長及び副会長には大変御苦労様でした。

編集局より  
今回の発行に当たりまして寄稿者の方々にはご協力頂きまして、誠にありがとうございました。ごさいました。

担当 小寺